

「文学館、これからどうなる！これからどうする！」記録

日 時：2018年7月21日（土） 14時～16時30分

会 場：町田市民文学館 第6会議室

参加者：25名

1. 参加者自己紹介

日頃、文学館と関わりのある方々（短歌・連歌や俳句・連句の実作者、文芸誌主宰者、イラストレーター、利用団体・サークル関係者、地元住民、元職員、未来の会世話人など）が、文学館との関わりを中心に順次自己紹介。

2. 報告：「公共施設再編計画と文学館」

未来の会の守谷が、別紙資料に従って文学館が「存廃の検討」を求められるに至った経緯や文学館としての対応について報告。

3. 意見交換：「市民としてこれから私たちにできること」

OH：仮に文学館を委託したらコストは安くなるのか。文学館にとって重要なアーカイブ機能は、そもそもコスト削減の対象として語れるような事業なのか。コストでは語れないから「公」がやっているのではないか。そういう点がきちんと議論されているのか。

守谷：費用対効果といった議論の中で、文学館の意義や必要性を説いても、一般の行政担当者にはなかなか納得してもらえない。往々にして図書館でやれば良い、といった程度の認識である。

SS：町田市が市として文化的に生きていくために、どうしてもなくてはならない施設は、採算やコストの論理ではなくて、これだけは絶対に必要なのだという論理をつくらないと文学館は負けてしまう。

YH：資料を整理して学校の空き教室なんかに置いたら、死蔵になってしまう。必要な時に必要な人にすぐに出せないと意味がない。

HK：レジュメの冒頭にある、2015年5月実施の「市民参加型事業評価」の時のやりとりはどうだったのかというのが気になる。このタイミングは、文学館とは何かについてしっかり伝えるチャンスでもあったはずだが、このことはもう済んだことというのではなく、これからも、自分ならどう応えるかという思いで調べておくことが大事と想う。

それにしても、「なぜ文学館が必要なのか」、「そもそも(文学館に)市民ニーズはあるのか」といった言葉がさらっと出て来る感覚には、これが町田の現状かと、ためいきが出る。文学館ができる前、確か2003年に「これが町田の文学館だ！—文学館の基本計画を考える—」というシンポジウムがあって、その中で法政大学の田中優子さんが、文学館の役割を資料収集と展示に固定化してしまうのではなく、地域文化創造の視点を熱く打ち出していけるようであれば文学館存立の意義はないというようなことを仰り、強い印象を受けたのを覚えている。あの時のシンポジウムの記録は冊子になっていると思う。もう一度文学館設立の原点に戻ってみることも大事ではないか。

FF：私も長く役所にいたのでよくわかるのだが、いくら生涯学習とか文化行政とか言っても価値観が違うというか、なかなか言葉が通じない。相手の土俵に乗るのではなく、こちらの価値観が伝わるような方法、取り組みはどうした良いのか。

TN：本当に通じない。絶対に。具体的に文学館の何が大切で、何を残したいのかを紙に書いて渡さないと、全然わかってもらえない。指定管理にしても、仕様書をどこまでしっかり書き込むかということが大事。それをちゃんとやらないといけない。チェックするのも大変なのだが。

OK：事業評価とか、市民・有識者5名の判断で廃止するとかが決まっちゃうというが、行政側だけじゃなくて文学館の利用者、実際に利用している市民の声をちゃんと出していくべきだ。

IM：私も市の委員会とかいろいろ出たが、どうも結論ありきで、いくら意見を言っても座長がその方向に持って行ってしまう。本来ならなぜ文学館できたのか、原点に帰ってきちんとと言わないといけない。それが1点。それから、コスト、コストというけれど、こういうものはコストで辻褃が合うなんてことはない。私も現役時代たくさん会社を作ったが、民間会社だって赤字にならないが必要だからやるという部分がある。公共施設でコストの議論ばかりしたら、みんな無くさなければならない。それを言うなら市の職員だって、市議会議員だって多すぎる。

HR：根拠示して通るような世の中ではなくなってきた感じがする。価値観が変わってきているのは確かで、私に言わせれば世の中「バカ化」している。本当はこういう施設が存廃を問われるなどというのは、そもそもあり得ないと思っているのだが、そういう世の中になってしまっているのだから、そこでまともな理論とか理屈を言っても通らない場合が多い。特に文学館を使っていない人には、そういう人にもわかるような新たな文学館の役割を創る必要がある。

私は、文学館は学習面に力を入れるべきで、文学を学べる場であってほしいと思っている。過去の遺産に頼るだけでなく、未来に繋げていくための活動を文学館は行うべきだ。私の弟も脚本を書いているが、みんな自己流でやっている。若い人がプロとしてやっていくための機会を、文学館が提供するというような取り組み。著名な先生がいて、これだけの若者がここで文学を学んでいますというような、分かりやすい根拠を示さないと文学館は守れないと思う。他の市町村ではやってないことを町田ではやっているという、新たなステイタスを作ることがいま求められているのではないか。

売れた作家がたまたま“町田ゆかり”で、それを取り上げて展示するというのは簡単なこと。そうじゃなくて、そういう作家がもっと生まれるように種を蒔く。そういうことに責任を持つというか、面倒を見るというのも文学館の仕事ではないか。

NY：文学館は開館当初から連句という伝統的な文芸の普及に力を入れている。大変すばらしいことだと思う。私は、連歌という世界に誇るべき日本古来の文芸をやっているが、文学館は連歌などにも力を入れて欲しい。

守谷：本日、お配りしたアンケートの4項目めで、「文学館がより良い施設となるために、市民としてこれからどのようなことを行うべきだとお考えですか」という問いを設けさせていただいた。特に、文学館をサポートする市民の会の立ち上げなどについてはどうか。

AK：「友の会」というと版画美術館や鎌倉の図書館友の会とか、ファンクラブみたいなイメージがあるが、そういう会があっても悪くはないが、もっと違う形のものがあって良いのではないか。

TT：版画美術館の友の会は、館の運営などにはあまり関わっていない。「美術館事業への協力・支援」と謳っているが、いわば館の仕事の下請けのような感じ。一般会員は3000円の年会費（入会時5000円）を収め、会報を発行したり美術館巡りを行ったりといった活動。企画展のときに

は無料のチケットがもらえたり、ショップの割引といった特典がある。都築区の図書館にもファンクラブがあって、お年寄りなどが楽しみに参加しているようだが、文学館はファンクラブではしょうがないし、そういう会は成り立たないと思う。

YH：図書館協議会の代表をしているが、役所側と対等に話し合うときに、それを支えてくれる市民の会がバックにあることは大変心強い。館の下請けを行う組織ではなくて、館を盛り立てるためにみんなで考える会は大切だと思う。

MN：さっきのHRさんの発言に賛成。館が市民からサポートをしてもらおうというとき、日頃文学館からサポートされている市民がいれば、自然とサポートするはず。作家に限らず、これから何かをやると思う若い人たちを、編集者とか出版社とかと繋げるような役割が普段から果たせるようになっていっていると、文学館を大切だと思う若い人が増えて来る。そっちが先かなと。

TY：私もいまの意見に賛成。文学館を持っているということは町の強さだと思う。東京の町田の、そこの経済的コストが云々という考え方をしなくとも、これから未来へ向けてのアーカイブ、これから未来の文学とかの受け皿、拠点にもなりうる。三浦しをんさんが出て、村田沙耶香さんが出てきて、その前にむろん遠藤周作さんや片岡義男さんとか、すでにアーカイブはあるわけだけど、未来へのアーカイブの受け皿を持っているということはすごい強いことだと思う。

ひとつ考えたらいいかなと思ったのは、東京の町田市民にとってというだけでなく、16号線沿線のカルチャーとか、新しい武蔵野、あるいは多摩のカルチャーとか、アメリカでのサバービアとか、郊外型文学の拠点みたいな形で、ウエストコーストみたいに町田・吉祥寺・八王子・横浜・鎌倉とかがひとつの文化拠点になるかもしれないような芽を10年かけて出してきたのに、いま効率的に採算が合うか合わないかでやってしまうのはとてももったいない気がする。

守谷：TYさんは町田で文芸誌を出されているが、文学館がプロを目指す若い人の後押しをするということについては。

TY：HRさんの言われることはすごくわかります。ただ、教育施設がやる「小説教室」みたいな形ではない、ある種“私塾”みたいなものが良いと思う。あそこの文学館、何か変わったことやってるよ、みたいな。たぶん、「早稲田文学」も「三田文学」もはじめはそんな感じだったんじゃないか。スポーツも良いけど、せっかく三浦さんみたいな人がいるわけだから出てきてもらって、これから10年、20年先の文学の受け皿となる町を。

HR：町田は絵を画いたり文字を書くにはかなり理想的な町。例えば家賃が安い。町がコンパクトで、すごく便利な町。アートでいうと絵を画くのは町田で十分なのだが、ただ発表の場がない。ギャラリーもあまりない。だからみんな南青山とかへ行く。そこに行けば編集者やデザイナーがいるから。せっかく町田で生産されたものが外に行ってしまうので、もったいないと思う。町田が文化産業の都市を目指すということになれば、芸術の町として栄えていく可能性があるのに、何もしていないからみんな外へ行く。文学館は、若者をサポートする役割が持てると思うし、若者に支持されれば行政は必ずそっちに顔を向けるようになる。

SS：今日の話聞いていて思うのは、「文学館を守る」じゃダメで、「もう一回、新しい文学館を創る」という発想が大事じゃないかということ。もちろん、いままでの積み重ねはあるが、それだけでは守り切れない。今日いろいろと出た提案を活かせるような、この町の誇りとなるような文学館をこれから創っていこう。新たな文学館運動を始めようではないか。近々、数名の方に集まってもらって、再度これからの具体的な取り組みを話し合ってもらいたい。

守谷：提案のように改めて集まりを持ちたい。ご発言いただいた方々には、後日日程等をご連絡す

るのでぜひご参加を。

(文責:守谷)